

延喜式研究と水産研究を題材とした異分野 融合研究体制の確立にむけた取り組みと課題

A Trial to Make Frameworks of Trans-Disciplinary Research
Based on a Collaboration Between *Engishiki* and Fishery Reseraches
ISHIKAWA Satoshi, HANAMORI Kuniko and MUTO Fumito

石川智士・花森功仁子・武藤文人

はじめに

文献史学を含む古典籍の研究と水産研究、両者には当然のごとく大きな隔たりがあるが、具体的に何がどのように異なっており、両者が共同するためにはどのような課題があるのかを明示した研究報告はおそらくないだろう。今回は、今後の新たな分野統合および新領域創生に向けた取り組みの一つとして、両者の共同作業に焦点を当ててみたい。

1 古典籍研究と水産研究の共同

古典籍に多くの水産物が記載されていることはよく知られている事実かもしれない。実際に、万葉集にはウナギを題材とした和歌があり⁽¹⁾、古事記や日本書紀にはクジラの記述などがある⁽²⁾。また、古い文献や資料を活用した海産物や漁業・漁村の研究といえば、洪澤による魚名の研究⁽³⁾や鶴見や赤嶺によるナマコの研究^(4,5)、村井によるエビの研究^(6,7)、秋道らによる海洋民族学や田和による石干見などの漁法の研究例^(8,9)もある。しかしこれらの研究が水産の研究かといわれると、様々な意見があるものの、現代の水産学の分野に位置づけるのはかなり難しいのではないか。水産分野における文献資料に基づいた研究例は平本によるイワシの研究⁽¹⁰⁾や武藤によるマグロの研究例⁽¹²⁾など僅かではないだろうか。

今回の古典籍や文献史学の研究者との協働の中で意識されるようになってきたものであるが、一般的には海産物や漁業・漁労の研究は水産学であるという認識があるかと思われる。しかし、現代的な水産学は、水産振興および持続的発展を目指した産業科学であり、漁具漁法、水産資源、増養殖、食品加工といった分野が中心である。最近では、環境問題や経済学的な研究例も増えつつあるが、水産学といえば、どれだけ効率的に漁獲が行えるか、どのくらいの漁獲が可能かといった漁獲漁業に関する科学的な研究と、増養殖の技術開発および保存や商品開発および水産品の品質保証や安全性といった加工技術の研究となる。水産分野を網羅的に取りまとめている水産海洋ハンドブックにおいても、漁村については、漁港や水産海洋の安全性とまとめられて語られているのみであり、歴史

的な漁村の成立や漁村独自の文化風習、街並みや集落構造などについては触れられていない。⁽¹³⁾このような視点に立つと、平本や武藤らの研究例は、資源管理に連なる研究的側面があり、水産研究と位置づけられるが、前出の民族学や地域研究の成果は、水産業振興との関係性を見出すことは難しいと思われる。

今回、古典籍研究と水産研究の協働（もしくは統合および融合かもしれない）を進めるにあたり、双方の分野や活動および成果の評価に関して、相互理解を深める必要があると強く感じている。これまでの作業を通じて、他分野から見た水産と水産分野内における水産の認識には大きな隔りがあると感じている。一方で、水産分野における人材で、古典籍や文献史学に興味を持つ研究者も僅かであり、その僅かな興味を持つ人材であっても、古典籍を実際に取り扱った研究者はかなり少ない。ただし、古典籍研究を活用した水産研究の在り方は、水産研究に新たな分野を構築することにつながるだけでなく、おそらくは、古典籍の研究についても、新たな研究価値を生み出すものにつながるのではないかと期待している。このような新領域の創生は、一朝一夕で達成するようなものでないことは重々に理解しているが、今回の取り組みが、新たな研究体制の確立や協働を進める際の一つの道標を提供することはできるのではないかと考えている。

2 研究テーマの設定と研究体制の確立

古典籍研究や文献史学の研究者と水産学の研究者では、双方に分野の認識や活動内容に関する誤解があることは、すでに述べた。この溝は、多くの協働研究や作業を積み重ねることで解消していくしかないと思われる。では、双方の研究活動や成果の評価方法が異なる現状において、どのようにしたら協働が可能な研究体制を構築できるだろうか大きな問題となる。

いずれの分野の研究者であっても、それぞれの分野における論文や作品を公表し、それぞれの分野のルールによる評価を受けることには変わりはない。そのため、個別分野での業績を考慮することが、異分野融合の際にも重要となる。言い換えれば、それぞれの研究者がそれぞれの分野における業績を上げることができるテーマ設定を行う必要がある。この点は、異分野融合を軸に協働研究を行ってきている総合地球環境学研究所の各所成果物にも、その重要性が挙げられて^(14, 15, 16, 17など)いる。

しかし、個々の研究者が自らの専門分野に固執してしまえば、異分野融合や協働は形骸化してしまい、メンバーだけみれば異分野融合だが、活動や成果は個別分野だけということになりかねない。このため、個別の研究成果を統合する課題設定やテーマの設定が必要となるだろう。今回のケースであるならば、古典籍と水産分野の協働のカギを解明し、その具体的な活動モデルを提示するということになるかもしれない。

テーマ設定と共に、だれがメンバーとなるのかという体制づくりも大きな課題である。これまで触れてきたように、水産分野の研究者の多くは、古典籍や延喜式に興味はないであろう。個人的な興味を持つ者は多いかもしれないが、研究の対象として取り扱う意志を持つ者は少ないと言わざるを得ない。となれば、分野統合といった大上段に構えた体制からのメンバー選出は無理であり、極めて個人的な関係性から興味を持つ者を募ることにならざるを得ない。このようなメンバー構成で研究を実施する場合、研究が進むにつれ、テーマ設定が変わることや、メンバーが入れ替わることも予想される。予めテーマを設定し、そのテーマに向けた活動に関して最適な人材を選出してチー

ム編成を行うことが増えてきた理系研究分野からは、非効率的との非難を受けるかもしれないが、真に新しい分野の構築を望むのであれば、この非効率的な挑戦を、メンバーとなる研究者全員が了解しておく必要があるだろう。

延喜式研究と水産研究の協働に関しては、古典籍における水産物の表記から当時の水産物の価値の再評価や現代的価値との比較から新たな価値体系の構築を目指す石川と、水産に限らず広義の意味における農業と農産物の変遷並びに食文化の研究を進めている花森、そしてマグロの資源研究において古典籍を活用した実績を持つ武藤の3名が参加することとなった。個々の研究課題も現状では挑戦的な要素が強く、必ずしも成果が見込めるものではないものの、いずれの研究者も、古典籍研究と水産研究の新たな枠組みについては興味と研究活動を展開する意志を有している。今の段階ではこの理解が重要であると感じている。

3 延喜式研究と水産研究の協働作業の実際と課題

これまでに数回の研究会の参加、国立歴史民俗博物館の小倉准教授と清武助教らと交えた勉強会を数回開催してきた。清武氏の取りまとめられた延喜式における水産物の記載情報やアワビの研究を紹介していただき、また、延喜式だけでなく倭名類聚抄や木簡に関する情報をいただいた。延喜式に記載されている水産物については、カツオや鮎など、現代の分布と合わせても納得のいく産物がある一方で、ミルなど現代的には水産物の範疇からは外れてしまっている海藻や、三河や能登に海鞘の記載があり、現代の分布や産地とはかなりずれているものも記載されている。同時に、現代的には水産研究の中心的な位置を占めているマグロやウナギの記述はほとんどないか全くない。クジラの記述も認められない。ほかの書物や資料からは、当時もマグロ、ウナギ、クジラの類も水産物として消費はされていたはずであるが、その記述がない背景には、その当時の水産物の消費や流通および社会情勢が大きく影響しているものと思われる。加えて、延喜式が当時の租税など国家が必要とする事柄を取り扱った書物であるということから、定期的に一定量を納められないものは租税対象とはならなかったことが予想されるとの情報も清武氏より提供された。このような情報共有は極めて重要であり、このような研究会を繰り返すことが、今後の協働と成果とりまとめに重要となることが強く印象付けられた。

一方で、各人の個別テーマに関する活動については、その課題もわかってきている。延喜式における水産物の記述については、清武氏らのとりまとめの資料をお借りしながら進められるものの、他の文献に関する記述を水産分野の研究者が独自に調査しようと思うと、これはかなりの難題であることがわかってきた。以前ご紹介いただいた木簡については、木簡データベースを活用してカツオやミルなどの記述を探ってみたものの、まずは木簡データベースの使い方から学ぶ必要がある。同時に、万葉集のデータベースや国会図書館の資料検索を活用するにあたっては、原文もしくはそこに記載されている内容を理解しなければならず、古典籍研究の基礎のまた基礎レベルを学習する必要がある。加えて、土佐日記など現代語訳がある書物についても、出版社や出版時期によってその内容や解釈が異なるケースもあるが、文献を主に研究対象とされている方ならば当然知っている内容を異分野の人間は全く知らない。知っている者にとっての常識は、知っている者には気づけない。反対に、知らない者は知らねばならない事項を知ることさえ気づかない。この違いはとて大

きいものと感じる一方で、ここをどのように超えるかが、今回の異分野協働のカギとなるとも感じている。この点は、今年度中にぜひある程度の方向性が出せるよう、小倉氏や清武氏らをはじめとする研究メンバーと協議したい点である。

おわりに

文理融合研究や学際統合の重要性が叫ばれている現代においては、総論として文理融合の在り方の議論よりも、具体的かつ経験に基づくケーススタディーの積み重ねが重要であると考え。特に、これまで参加した研究集会や個別に行った勉強会など、回を重ねるたびに、その重要性を認識してきている。一方で、個別課題の研究をどのように進めるかはまだまだ未確定な部分がある。延喜式における水産物の記述自体は清武氏が進めているが、その妥当性や現代との異質性は水産研究者が指摘することはできる。しかし、その協働作業で得た知識をどのように業績としてとりまとめるのか、だれがまとめるのか、また、残された課題やさらに検証すべき事項をだれがどのように進めるのか？をできるだけ早い時期に決める必要があると考えている。ただし、実際には当面のところ古典籍および文献史学の方が中心となり、その疑問点や質問を水産分野からお答えする形でしか、進められないのではないかというのも実感としてある。なぜならば、先ほど述べたように、古典籍の記述を理解する能力を水産分野の研究者は、まだ十分には有していないからである。今回の活動を通じて、少なくとも参加している研究者はその基礎的な技能をどのように獲得できるか、その過程を記録し、今後の参考に提供できればと考えている。

引用文献

- (1) 井田徹治, ウナギー地球環境を語る魚, 岩波新書, 225頁, 2007.
- (2) 秋道智弥, クジラは誰のものか, ちくま新書, 231頁, 2009.
- (3) 渋澤敬三, 日本魚名の研究, 角川書店, 364頁, 1959.
- (4) 鶴見良行, ナマコの眼, ちくま学芸文庫, 1993.
- (5) 赤嶺淳, ナマコを歩く, 新泉社, 392頁, 2010.
- (6) 村井吉敬, エビと日本人, 岩波書店, 222頁, 1988.
- (7) 村井吉敬, エビと日本人II, 岩波書店, 212頁, 2007.
- (8) 秋道智弥, 海洋民族学, 東京大学出版会, 1995.
- (9) 西村朝日太郎, 海洋民族学, 日本放送出版協会, 1974.
- (10) 田和正孝, 石干見, 法政大学出版局, 313頁, 2007.
- (11) 平本紀久雄, イワシの自然誌, 中公新書, 1996.
- (12) 武藤文人, 日本における鮭のマグロ類への比定の歴史, 東海大学起用海洋学部「海—自然と文化」, 第10巻] 第3号, 11-20頁, 2013.
- (13) 竹内俊郎, 中田英昭, 和田時夫, 上田宏, 有元貴文, 渡部終五, 中前明, 橋本牧, 水産海洋ハンドブック第3版, 生物研究社, 676頁.
- (14) 石川智士, 吉川尚, 幡豆の海と人びと, 総合地球環境学研究所, 362頁, 2016.
- (15) 石川智士, 渡辺一生, 地域と対話するサイエンス: エリアケイパビリティー論, 勉誠出版, 325頁, 2017.
- (16) 石川智士, 渡辺一生, 地域が生まれる, 資源が育てる: エリアケイパビリティーの実践, 勉誠出版, 288頁, 2017.
- (17) 総合地球環境学研究所, 知はいかに跳躍するか?, 2015.

石川智士 (東海大学海洋学部, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

花森功仁子 (東海大学海洋学部, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

武藤文人 (東海大学海洋学部, 国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者)

(2018年9月18日受付, 2018年12月10日審査終了)